

月刊

地域保健

8
2009

●特集

認知症を地域で支える
保健師ができる支援とは

●FACE2009

宮内清子さん

愛媛県立医療技術大学保健科学部学部長



JURI 2009 AUGUST

必要なことにタイムリーに、つくろう 1／24時間

コミュニケーションからコラボレーション、そしてヘルスプロモーションへ

愛媛県立医療技術大学保健科学部学部長

宮内 清子さん



保健師を養成する教育システムが大きな曲がり角に差しかかっています。去る7月9日、「保助看法」の一部改正案が衆院を通過、来年の4月から保健師と助産師の国家試験受験資格の教育年限が「6ヶ月以上から『1年以上』に延長されます。また、現代社会における看護教育の質を問い合わせ直し、文部科学省の検討会では大学の教育カリキュラムについて議論が重ねられています。

年を追つて複雑さを増す人と人のつながりのなか、教育の現場から30年にわたりコミュニケーションと保健師を見守つていらつしやる、愛媛県立医療技術大学・宮内清子保健科学部学部長にお話を伺いました。

学生の意欲は、働きかけ方によって変わる

文部科学省の検討会で、大学における保健師教育について、大学による選択制の導入が議論されています。先生のお考へをお聞かせください。

なかで構築していく学問です。本学の地域看護学の教員の多くは、県内の保健所保健師を経験しています。その後、学ぶ必要を感じて大学院などで力をつけて、実践と理論の接点といいますか、コラボレートを考えながら教育の展開に工夫を凝らしています。

宮内 各自治体により、実習場の確保をはじめとする問題は多々ありますが、学生たちの「教育を受ける権利」の享受とともに、それを保障する大学側の精いっぱいの努力が重要だと思います。地域看護学は地域の人々の暮らしの

普段から、大学と保健所・市町村等の現場がどうつながり、お互いに助け合っているかは、実習体制や教育の質にかかわると思います。教員が地域や健康課題に常に関心を持ち、学生の一歩前を歩く力を持つていないと、学生

によい刺激を与えることはできません。「コミュニケーションが大事」と言いますが、学生が何かに興味を抱いたり、知りたい、聞きたいと思わなければ、やりとりは生まれないと思います。

昨年度、学部長になつてから、1年生の「医療概論」という、医療人としての考え方を学ぶ科目を担当しています。そのなかで地方紙を読んで、一つひとつ町や村で今、何が起こっているか、「健康」に引きつけてその背景や要因を考える学習を行つています。地域の暮らしの実態や健康の様子に、ぜひ日常的に関心を持つてほしいと願つてのことです。

このような学びが「入り口」で、本当に学生たちの目が開きますし、学生が意欲を持つかどうかは、学習刺激のありようにも影響されるので、あらかじめ選択させる物差しにはなりにくいですね。実習も含めて教育の質保証は大学側の責任だと思います。



p16 認知症対策でまちづくりを

認知症介護研究・研修東京センター 永田久美子

p24 認知症に備える、早期の支援

認知症の人・家族・住民の声を聞いて 宮城県保健福祉部 斎藤絵美

p30 医療と介護の協働をどう進めるか

山鹿市役所 佐藤アキ

p36 家族の負担を軽くするために

社団法人認知症の人と家族の会 勝田登志子

p40 若年認知症の本人・家族が求める支援とは

大阪市社会福祉研修・情報センター 沖田裕子

p44 BPSDに対処する

東京都北区健康福祉部 海老原英子

p50 保健師が知っておきたい認知症の基礎知識

東北福祉大学せんだんホスピタル 浅野弘毅

p56 事例 1 「忘れてもあちこたねえ 地域で支える安心ネット」を構築

新潟県魚沼市の取り組み 魚沼市地域包括支援センター 下村春美

p64 事例 2 神経ネットワークから学んだ町の組織づくり

ポンポコリン勉強会からプロジェクト若狭へ 福井県若狭町の取り組み 若狭町福祉健康課 高島久美子

特集

認知症を 地域で支える

保健師ができる
支援とは

近年は若年性認知症にも焦点が当てられており、認知症対策はより広い視野が求められるようになった。国は從来の認知症関連予算事業を再編成し横断的・総合的な対策を推進しているところで、地域にはたとえ認知症になってしまっても本人・家族の負担を最小限にとどめ人生の最期に軟着陸できる体制づくりが求められている。そうした中で、鍵を握るのは、やはり保健師の働きであろう。

特集では認知症の現状と課題を整理し、具体的な处方せんをまとめるとともに、先進的な地域の事例を報告する。



photographs : Sei Kamiyasu



藤原加奈さん

ふじわらかなな

鳥取県八頭郡智頭町福祉課

文・写真

西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

田園風景を眺めながら自転車で訪問したい

座業の多さに戸惑いも



町の中心を流れる千代川を背景に



鳥取県の東南に位置し、周囲を一千メートル級の山々に囲まれた智頭町は総面積の9割以上が山林だ。人口は約8400人。産業は林業が昔から有名で、特に「杉のまち」とも呼ばれている。もつとも、近年の木材価格の低迷や林業従事者の高齢化は避けられず、いかにして町の主産業を守っていくかも重要な課題である。

と、ここまで書くとよくある日本の

ひなびた山村だ。しかし実際に訪ねてみると、町には古くからの宿場町らしい風情が残され観光的にもおもしろい。

また、町の中心部には立派な智頭町保健・医療・福祉総合センター「ほのぼの病院」があり、ここは国民健康保険智頭特別養護老人ホーム智頭心和苑、智頭デイサービスセンター、智頭町保健センターおよび智頭町学校給食センターの5部門で構成されている。

「こんな山間の町に随分と立派な施設があるものだ……」

スポート少女

初めて見た人はきっと驚くに違いない。館内は木のぬくもりが生かされ、とても落ち着く。大きな施設だが人で溢れ返っているわけでもなく、優雅な時間が過ぎているようにも感じる。しばし見学を決め込み歩き回っていると、偶然、町の保健センター窓口に行き着いた。これが今回のひよこ保健師がいる場所だった。

と、明るく話し始める。ではとてもおとなしい感じの子だったのかというと、ちょっと違うようで、小学校から



智頭宿。県内最大の宿場町として栄えた名残が今も残る

名前は藤原加奈さん。智頭町保健センター（福祉課健康づくり推進室）に所属する26歳。智頭町に隣接する八頭町の出身だ。

「子どものころは花屋さん、ケイキ屋さん……。そんな職業に憧れていたごくごく普通の女の子でした。習いごとは書道をしていまして、高校まで続けまし